



国重文指定記念誌「りゅうのひかり」

連資料（地図、文書、典籍等）六九三点が今年三月、国の重要文化財に指定されることが決まった。赤水の事績、また江戸中後期の文化史・地理史を考えるうえで、価値ある資料群という。

この決定を記念し、赤水の生誕地・高萩でその功績を伝える活動に取り組み長久保赤水顕彰会（佐川春久会長）が先ごろ、絵本「りゅうのひかり」（文と絵・と きさききよし、解説・夏井芳徳）を

伊能忠敬が実測による正確な日本地図「大日本沿海輿地全図」を作製する半世紀近く前に、日本で初めて緯線、経線が書かれた実用性の高い地図「改正日本輿地路程全図」（赤水図）を作った江戸時代の学者・長久保赤水（一七二七〜一八〇二）。その関

発行した。赤水が地図上に記した四倉（福島県いわき市）沖の不思議な現象「阿伽井岳龍燈」についての記述を基に、自然の神秘と赤水の人物像に迫る内容が反響を呼んでいる。発行の経緯や内容、また同会の顕彰活動について佐川さんに伺った。

SPOT 自然の神秘を写真

「阿伽井岳龍燈」とは、四倉沖の海で毎晩発生するかがり火ほどの大きさの火が、川をさかのぼって阿伽井岳（現・関伽井

（現代語訳）四倉沖の海で、毎晩、陰火が発生する。大きさは篝火ほどである。火は龍川を遡り、阿伽井嶽（関伽井嶽）の麓に達し、大きな杉の枝に飛びつき、あっという間のうちに林の中に消える。このようなことが次々と、夜の初めから、翌日の日の出時分まで続く。火は延々と、途切れることなく続き、その数は数えきれない。月明かりのある夜は光が弱く、月明かりのない夜は光がはっきり見える。この火は阿伽井嶽（関伽井嶽）からしか見ることができない。他の場所からは一切、見えない。何とも不思議だ。そのため、この火は阿伽井（関伽井）龍燈と呼ばれている。



赤水図第2版に見られる四倉沖部分の書き込み（写真提供／高萩市教育委員会）



JR高萩駅前に建つ赤水像と赤水図の碑

嶽)の麓に達し、林の中に消える現象のこと。赤水はこの現象について、夜の始めから翌日の日の出まで途切れることなく続くが、阿伽井岳からしか見ることができな、という内容の記述を「赤水図」第二版(一七九二)の四倉沖の部分に残している。地図には周防灘(瀬戸内海西部)や九州・有明海の部分にも同様の現象があることが記されているが、四倉沖の記述が最も詳細だ。絵本「りゅうのひかり」は、

市在住)が十数年来、構想を温めてきた作品という。数々の受賞映像作品等で知られるクリエイターのときさきさんにより、現在は見ることができない不思議な自然現象がシンプルな文章と繊細な色遣いで幻想的に表現され、人知の到底及ばぬ自然の神秘と偉大さに圧倒される。

### SPOT 飽くなき探究心と向学心

また巻末には、いわき地方の歴史や伝承に詳しい夏井芳徳さん(医療創生大学

客員教授)が、この現象について赤水が言及した資料を網羅し解説文を寄せた。それによると、赤水は現地に赴いてこの龍燈を実際に見ており、その時の龍燈の様子を描いた図が掲載された資料もあるという。中国の文献にある不思議な火に関する記述を引き合いに出しながら



佐川春久さん

ら考察もしており、科学者・赤水の飽くなき探究心がうかがえる。農業の傍ら儒学、天文学、地理学などを修め、水戸藩六代藩主・治保公の侍講にまでなった赤水の真摯な学びの姿勢も垣間見え、「一人でも多くの子どもたちに読んでもらえたら」と佐川さんは話してくれた。

### SPOT 「赤水」の名を教科書に

同会は平成四年(一九九二)の創設以来、赤水の生涯を描いた漫画やオリジナル切手シート、「赤水図」レプリカの発行など、独創的な顕彰活動を次々と展開してきた。現在全国に約六百人もの会員がいるが「伊能忠敬の陰に隠れ、赤水の知名度はまだまだ低い」と佐川さん。生誕地・高萩に「赤水記念館」を構え「赤水の名が教科書に載る」その日まで、同会の奮闘は続きそうだ。